

いつもの空清さんの舞台という風に始まった。実際に見たのは今年の『お粥かくしの長暖簾』とこの作品だけだから、こんな風に言うのはおかしいことだが先ずはそうに感じた。このグループのことは、よくは知らないが、浜崎さんひとりが演者ということらしいので良くも悪くも浜崎さんを観に行くことになる。そして成否は彼女の肩にかかっている。大変なことである。上演後、演出の方が感謝を述べておられたように、毎年大勢の方が観に来られるのは素晴らしいことだ。

今回の舞台は、浅田次郎が書いた新選組に纏わる小説の序と第1章から抜き出した作品である。したがって、出来事と心情は描かれていても物語としては序に過ぎない。著作権関係の苦労を仰っていたが、残念ながら入り口だけではいくら情感豊であったとしても上演作品としては物足りない。今回は朗読をやりたかったというようなことを終演後仰っていたが、見る限りその違いは観客には重要とは思われなかったし、そんなことより本当はどんな話をやりたかったのかが気になった。太夫が無礼討ちされるという決して単調ではない話は大いに情感に訴えたが、元々この部分ひとつを取り出しても作品とはならないように思う。太夫の死は糸里には事件だったが、観るものには悲惨な出来事であっても事件とはならなかった。

昨年は「聞き書き」で今年は会話文が多く含まれている小説、大いに異なって然るべきだし、そこを期待して臨んだが、同じような空気が流れていた。思い切って違った面を見せて欲しい。朗読に正解というものがあるとは思わないが、私には地の文が少し重く感じられた。文体と読み方がマッチしてないからではないだろうか。時々語尾が聞き取れないのはそのせいかもしれない。随分ゆっくりと、またたっぷり間を取っておられたけれど、それも重くなっている原因かもしれない。作者はもっとテンポよく書いているように思う。それと、音羽太夫が少し老けすぎて聞こえたのが残念。太夫には花がないと務まらない。

とはいえ、全体に観客は満足していたように見受けられた。今後も大いに期待したい。